

I 北東アジア地域研究拠点として始動！

大学共同利用施設機関法人 人間文化研究機構は、国内外の関係大学・機関と協力連携して北東アジア地域研究ネットワークを構築し、我が国にとって学術的・社会的に重要な意義を有する北東アジア地域の文化、社会、政治、経済、環境等の現状について学際的・総合的に調査研究を進める「北東アジア地域研究推進事業」を平成28年度より6年間にわたり実施する。人間文化研究機構では、まず国内5研究機関を本事業の研究拠点として指定し、相互に連携しつつ、それぞれの課題を探求する体制を整えた。その5つの研究拠点のひとつとして、富山大学極東地域研究センターが指定された。極東地域研究センターは、その他の拠点研究機関である国立民族博物館、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学北東アジア研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターと連携しつつ、極東地域研究センターが本事業において提案した「国際分業の進化と資源の持続可能な利用に関する研究」を内外研究機関・研究者との協力のもとに実施することとなった。

極東地域研究センターが実施する「国際分業の進化と資源の持続可能な利用に関する研究」は、本センター馬駿教授をプロジェクト・リーダーとして、社会経済システムと自然環境システムといった2つの視点を融合しながら、北東アジア地域の経済活動における国際分業・協力関係と資源の持続的・共存的利用の可能性について学際的に分析することを目的とする。北東アジアの国際分業の進化の行方を分析するとともに、資源の持続的利用に関わる環境評価と資源ビジネスの可能性について探ると同時に、北東アジア地域研究の拠点として、研究調査の国際ネットワークを構築しながら、この地域の持続的発展の新たなあり方に関する政策提言をしていくことを目標としている。事業主体である人間文化研究機構からは、極東地域研究センターに対し事業経費の配分を受けると同時に、研究員の派遣を受けることになっている。

本事業の事業開始を前にして、平成27年12月22日に人間文化研究機構の立木成文機構長、佐藤洋一郎理事といった方々が富山大学遠藤俊郎学長および二階堂敏雄理事を表敬訪問し、本事業の推進での両機関の協力について意見交換が行われた。これをもとにして、地域研究推進事業「北東アジア地域研究」に係わる研究協力協定が人間文化研究機構と富山大学との間で締結される。

本事業の本格的始動を前に、拠点研究機関が一堂に会し、人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」

キックオフ・シンポジウム「北東アジアの再発見」が平成28年1月23日・24日両日に国立民族学博物館において開催された。

このキックオフ・シンポジウムでは、極東地域研究センターが第二セッション「北東アジアにおける国際分業の進化と資源の持続的利用：課題と可能性」を組織し、馬駿教授の趣旨説明に続き、仁荷大学の鄭仁教副学長、上海社会科学院の周馥琦研究員、本センターから和田直也教授と山本雅資准教授の報告が行われ、最後に今村弘子センター長を司会とする討論が行われた。

プロジェクト・リーダーである馬駿教授は、日中韓の国際分業関係は従来の垂直的分業関係から水平的分業関係へ変化しつつ、従来の補完的経済関係から徐々に代替的競争関係に移行するなかで、資源に関わる環境変化、国際紛争、貿易摩擦等の問題がますます深刻になっていると指摘した。今後のフィールド調査等を通じて、こうした現状を正しく把握し、(1)資源に関わる諸問題が企業の経営活動に与える影響に関するメカニズムを解明し、(2)資源利用の環境変化に適応しながら、技術革新を通して、国際的な競争優位を獲得するために、どのような経済関係を築くべきかを分析することを本プロジェクトは目指している。



写真1. キックオフ・シンポジウムの様子

極東地域研究センターが北東アジア地域研究拠点として認定されたことは、我が国における北東アジア地域研究において本センターが担ってきた役割を評価されたものと受け止めることができる。また、本事業は、本センターにとって新たな挑戦でもある。(文責 堀江 典生)

II JSPS 外国人招聘プログラムの活用

JSPSの外国人招聘プログラム(短期)を利用して、昨年(2015年)の10月に3週間ほどイギリスのノッティンガム大学のDr. Bouwe Dijkstra氏を招聘しま

した。Dijkstra 先生は私が 2011 年から 2012 年にかけて、在外研究を行った際の受け入れ研究者となってくれた方です。大括りの専門分野は私と同じ環境経済学ですが、論文のテーマとしては、地球温暖化問題を中心に扱っており、資源循環がメインの私とは若干異なりますが、興味をもって受け入れてくださいました。今回は、Dijkstra 先生の日本滞在中に研究以外の点で印象に残ったことを述べたいと思います。



写真 2：富山大学での講義

まず、富山滞在中に、共同研究の議論の合間を縫って、私が担当していた **Environmental Economics** (英語講義) のクラスで、特別講義をしてもらいました。Dijkstra 先生は、普段ノッティンガムで使用しているスライドとほぼ同じ内容を使うとのことでしたが、以前、イギリスで彼の講義にでたことのある私は扱っている内容はほとんど変わらないことを知っていたので特に心配していませんでした。しかし、講義中あるいは講義後の学生の反応をみると、？マークが頭の上に見えるような気がしました。講義に出ている学生は皆相応の英語力のある学生と感じていたのですが、イギリス英語へのとまどいが少なからずあったようです。とはいえ、今の学生は、これからインターナショナルな英語に接していくことは避けられません。その意味では、貴重な経験になったのではないかと考えています。



写真 3：広島大学での大学院生向けセミナーにて

また、滞在中に Dijkstra 先生の希望で、富山県の水産資源管理政策についてのインタビューを行

いました。Dijkstra 先生はノッティンガムでの講義の中で水産資源管理についてもテーマとして取り上げているようで、参考文献の中にあった日本の漁業管理の仕組み、すなわち、漁協制度に興味をもっていただけです。県庁の担当者はこの点を大変丁寧に説明してくださり、これまで漁業を全く勉強したことのない私自身にとっては大変貴重な機会となりました。

さらに、新湊漁港の漁師さんをご紹介いただき、港で直接お話しを伺う機会もありました。その中で普段生活している中ではなかなか理解できない漁業をとりまく現状を肌で感じることができました。

Dijkstra 先生は富山滞在の間で最も記憶に残ったことは、多くの人が親切にしてくれたことだと思います。小さなお子様を含むご家族で滞在されていたこともあり、大変多くの地元の方にお声がけいただいたと嬉しそうに話をされていたのが印象的です。特に私と Dijkstra 先生が仕事で不在の昼間の時間にお子様と街で過ごされた奥様は、「あるカフェでは半日話につきあってくれた方がいた」とおっしゃっており、特に地元の皆様と親交を深められたようです。私自身も今回の招聘プログラムを実施したことで思いもしないことを数多く学びました。JSPS をはじめ、この招聘でご協力をいただきました多くの方々にこの場をかりてお礼申し上げます。(文責 山本 雅賢)

III 地域研究四方山話 (17)

「向前一小歩、文明一大歩」

これは中国のある場所に貼ってある標語(対聯)である。米国のアポロ 11 号で月面に着陸したアームストロング船長の言葉「一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては大きな飛躍である」とは全く関係無い。

(ヒント 1) 中国語の「文明」はマナーあるいはエチケットという意味である。

(ヒント 2) 女性である筆者は実は本物を見たことがない。

つまり貼ってある場所～男性用トイレ

用を足すときにちょっとだけ前にできれば、飛び散ることがなくなりますよ、ということだということのようです。効果があったか否かについては残念ながら、筆者には不明です。

(文責 今村 弘子)